

## ゼロ歳児保育は避けられないのか

微笑みでさえ親からもらったものだと思はれる。生まれ落ちた発端から、集団で他人のお世話になったのでは、笑顔でさえ「所属不明」になってしまう。それ故、外国にゼロ歳保育は、あまり見受けられない。しかし我が国では、多くの勤労婦人が、ごく普通の事として、我が子をゼロ歳保育に付託する。何故なのだろうか。

私が中学校代用教員になったのは五十年の昔である。その頃離婚する夫婦は極めて稀であった。しかし今は違う。生別は決して珍しい事ではない。そのような時、最初に直面するのは経済問題である。

女性の場合、慰謝料などはもらえず離婚するケースがほとんどである。「別れてくれさえすれば良い」ということで離婚に踏み切るのであろうが、四十前後の女性を受け入れる職場がない。年功序列賃金体系が、「高年齢」の労働力の受け入れを阻んでいるからである。

結局スーパーのレジ、そのほかのパートに従事する事になる。しかし時給は八百円にも達しない。八時間働いても、月の収入は十五万程度である。家賃を払えば、一人が生きていく事され難しい。まして子供を抱え、その教育費まで支出しなければならないのだから、窮状は想像を絶する。職を捨てられない女性たち結婚でき、未来にどんな破局が待っているか知れない。夫が死ぬ事だっている。結局若い女性は、現在の職業をそのまま維持しておかなければならないのである。だから、たとえゼロ歳保育に我が子を委ねるとしても、職を捨てる事だけは避けるのである。

平均寿命が著しく伸びている。子育てが終わって五十歳だとして、女性はそれから少なくとも三十年を生きなくてはならない。

三世同居というような時代なら、家の中に様々な生き甲斐も見いだせたであろうが、子供が外に出て行った後の三十年をどう生きるかは、深刻な問題である。この意味でも、職業は維持しつつ子育てを続けるという考えがごく自然に生まれてくるのである。

時代風潮もあって、社会進出に対する女性の欲求は強い。人口減少の時代であるだけに、世の中も女性の優れた労働力を求めている。

しかしだからと言って、生まれたばかりの赤子を親元から話して良いというものではない。何か良い方法はないものであろうか。

専業主婦は卑しい生き方か

一つには、我が国の年功序列賃金体系を改める事である。これは、同一労働同一賃金という原則にも反する。年齢によってではなく、労働の質を強度に応じて給与を支払うというシステムに改めることはできないものであろうか。それができれば、労働力に流動性が生まれる。学校の場合、指導力のない教員を罷免しても、彼らに再就職の可能性が生まれる。事実、大工、左官、とび職などは、このような原則で賃金を獲得している。日本経済活性化のため

に避けて通れない道だと思うのだが、直ぐにはなかなか難しい問題であろう。

私にもう一つのアイデアがある。それは育児休暇を五年間、できれば十年間程度認める事である。もちろん無給で良い。子育てが一段落した段階で、休職に入った時期と同一の給与で、職場への復帰を認めるのである。これが実現すれば、ゼロ歳保育は激減するのではないだろうか。私の学校では、すでにこれを実施している。

ところで、女性が家事を生涯の生き甲斐とする事は、卑しい生き方なのであろうか。昔は「良妻賢母」という言葉があった。今ではすっかり死語になってしまっている。代わって「専業主婦」なる言葉が生み出された。しかし「主婦」は「業」であろうか。これを職業の一種として分類せねば気が済まないというあたりに、ある種の蔑視が潜んでいるように思われてならない。

(月刊誌「旬なテーマ」平成18年3月号(中経出版発行) 男の生きる道/女の生きる道 掲載)